



Title	ティンペミンの小説における女性像のゆくえ
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 47, p. 17-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テインペーミンの小説における 女性像のゆくえ

南 田 み ど り

The Characterization of Women by Thein Pe Myint

— From Khin Myo Chit to Thi Ta Pyoun —

Midori MINAMIDA

Thein Pe Myint's first novel, "Khin Myo Chit" written in 1933, was the short story about a patriotic girl. After that he wrote many women characters which are divided into several types. They played important roles in his novels. With his sharp observation, their sense of actuality and reality were delivered vividly. They were also deepened and developed by his experiences in his life.

After World War II, the numbers of his fiction reduced. Especially after "As sure as the Sun Rising in the East", he wrote only seven short stories and no long novels for 14 years. After these long intervals, he wrote "Thi Ta Pyoun" in 1967-68, in some sense, in order to recover his technical skill in writing novels. It was also his first long novel written about one heroine. But the characterization of Thi Ta Pyoun had some defects and it was criticized by many readers.

After "Thi Ta Pyoun", Thein Pe Myint did not write fictions any more. He wrote non-fictions and half-non-fiction novels exclusively until the day of his death. From Khin Myo Chit to Thi Ta Pyoun, the women characters show a lot about Thein Pe Myint's success and failure in fictions.

は じ め に

テインペーミン (1914—1978) の小説家としてのデビュー作は、女性を主人公とした「愛国者キン」(1933)である。評論家として既に世に名をなしていることには満足せず、彼は小説家を目差した。この処女作を彼は初恋にもたとえ⁽¹⁾、その晩年迄愛し続けた。その後、女性を主人公とした作品は少ないが、様々なタイプの女性像は彼の小説を豊かに彩った。

テインペーミンは、戦後徐々に小説から遠ざかる。彼の純粹の創作小説と呼べる最後の作品・

長編「ティーターピョン」(1967—68)も又、女性を主人公としたものであった。ティンペーミンの小説における女性像の諸特徴とその背景をなす作者の女性観の変遷を概括し、最後の創作「ティーターピョン」の意義を考察したい。

1

女性像はいくつかの型に大別できる。第一は老嬢型である。40才を越え、莫大な経済力を持ち、吝嗇で強慾である。熱心な仏教徒で、僧侶にだけは金を湯水の如く施す。金を愛するあまり結婚に消極的に見えるが、内心は希望を捨てていないところに、滑稽な悲哀の源泉がある。

それは短編「私の夫と私の金」(1934)の地主セインにはじまる。厳密にはセインは老嬢ではなく寡婦である。僧侶に対しては村一番の施主、小作人に対しては冷酷無慈悲な借金農作物の取り立て人という二つの顔を持つ。一攫千金を夢みて彼女に言い寄り婿におさまった男も、体のいい無給の雇人として酷使される。強盗に金と夫の命の二者択一を迫られ、躊躇なく金を選び斬殺されるセインには地主階級の特質が諷刺的に投影される。

短編「レディキン」(1936)では、未来の老嬢を思わせる露店商トゥエーの心理が描かれる。醜さゆえに男に愛されない26才のトゥエーは、若く器量よしの商売仇の客である学生の気を引くため念入りに化粧し、宝石で身を飾り出勤するが、高価な流行のハイヒール・レディキンのせいで転倒し負傷する。財力を誇示することで愛されようとする女のあせりと虚栄が皮肉られる。

長編「テッポンジー(進歩僧)」(1937)のソーニョンには、老嬢の特質が最大限に効果を放つ。金持で家柄がよく学識が深い。見つめられた者を震えあがらせるほどの特異な容貌を持つ。蓄財のみに励むように見えて、内心その醜さを自覚し、それだけ男への理想が高く、美男で酒博打に手を出さず適当に財もあり頭のよい男の出現を待つ。この条件を満たす破戒説教僧の甘言に乗り、前後の見境なく金を貢ぎ、男の死で我に帰る。仏教界退廃を諷刺して物議をかましたこの作品にソーニョンの存在は欠かせない。誘惑されるのが若い娘でなく老嬢であることが、作品に深刻さを与えずユーモアと諷刺に徹することを助けるからである。

老嬢は、短編「苦い甘さ」(1949)のごく一部に登場する地主ダウンメーで終る。ダウンメーの扱いは軽く、許嫁のいる息子ほどの年の主人公を財力にものをいわせて婿にする憎まれ役である。これら老嬢像はティンペーミンの女性像の中で最もリアルに描かれた。モデルは親類の老嬢達というが⁽²⁾、彼女達の特徴をよくとらえ、テーマにふさわしく創造したからこそ、真実味を与えることに成功したのであろう。

第二は女実業家型である。老嬢は1940年代で姿を消し、より近代的でスケールの大きい女性像が登場する。長編「愛すればこそ」(1951—52)のフラティン、長編「東より陽の昇るがごとく」(1950—53)のミャフミイがそれである。いずれも30代半ばで女盛りの美貌に恵まれ、教養があり頭の回転が早く、気取らず卒直である。都市で手広く事業を営み、男性以上の手腕を持つ。青年主人公が彼女達との不倫の愛を克服することによって成長するという意味で、作中重要な役割を

担う。

「愛すればこそ」は1948年から49年にかけて書かれたシナリオの小説化であり、フラティンはミヤフミイの原型をなす。事業拡張のため愛のない結婚を強いられ、夫と離別した後5才の息子を育てながら仕事に生きる。その一方愛を求め、恋人のいる学生を誘惑し金品を与えて愛人にする。だが再婚すれば財産の半分を前夫に渡すという約束に縛られ、再婚できない。愛と結婚は別と割り切り、事業が優先される。

ミヤフミイはフラティンよりやや複雑に創造される。不治の病の床にある半身不随の夫に代わり事業を取り仕切るが、夫への献身に疲れ、年下の学生との愛に逃避する。学生への愛と夫への罪の意識の板挟みに悩む。女としての顔と共に事業家としての顔も持ち、学生から独立闘争のための印刷所開設への出資を乞われても、利潤のめどがないものには手を出さない。個人として学生の生活援助や活動資金は出しても愛と仕事は別であり、日本軍進入時には日本軍にも取り入る。彼女達は経済的には満たされながら純粋な愛に飢え、愛に生きているつもりで実は事業を捨てることができない。利潤を追求し事業をさらに拡張せずにはいられない。老嬢の姿に地主階級の特質を投影して見せたティンペーミンは、彼女達の姿にも資本家階級のそれを投影したのである。これらの女性にモデルはなく「自由に空想して入れた」⁽³⁾ののだが、読者には実在感を持って受け取られ、後年迄そのモデルについての詮索があったという。ティンペーミンはそれを「非常に名誉なこと」⁽⁴⁾と誇った。全くの創造である人物像が現実的な迫力を持ったことは、ティンペーミンにとって人物描写における成功の一例であったといえよう。

第三は進歩的女性型である。デビュー作「愛国者キン」(1933)の主人公キントウエーがこの型の先駆けであったことから、ティンペーミンのこの型に対する関心がうかがえる。数的にもやや多いこの型を完成させることは、ティンペーミンの課題であったようである。彼女達のほとんどは中産階級の出身で、進歩的思想という共通点を持っていたが、そのあらわれ方や水準はまちまちである。

美しく賢明な教師で回教徒のキントウエーは、仏教徒で独立運動家の恋人を持ち、信仰と愛の間で悩む。恋人が闘争に専念できるように一方的に身を引き、病床に死んでゆく。行動には立ちあがらないが健気な愛国者として描かれる。

長編「女傑」(1934)のキンミンはもう一步積極的である。美しく勇敢で読書家で活発な女子学生である彼女は、集会で独立運動家の演説に感動し、それ迄の自分の生活を反省してビルマの現状を憂慮する。その急速な変貌ぶりに親や友人は驚くが、彼女は正しいことなら従うのが当然と意に介さない。キンミンと独立運動家の愛、2人の間に割って入るエリート学生など人物紹介の段階で作品は中断された。現存する部分にも章の脱落がある。中断の理由は作者の政治活動の多忙さであるというが、執筆時に構成が最後まで念頭にあったかどうかをティンペーミン自身記憶していないという⁽⁵⁾。

長編「ダベイフマウチャウンダー（ストライキを打った学生）」(1938)ではじめて、一定の完

壁を持つ進歩的女子学生ターミンが登場する。1936年のラングーン大学学生ストライキに参加した数少ない女子学生の一人として、当時のビルマでは最も進歩的な女性の部類に入るであろう。美人ではないまでも愛らしい容貌を持ち、化粧より健康を重視して既に他の多くの女子学生とは一線を画す。男女同権を唱え、社会主義をその最良の解決策と見る。娘の行動は認めるが勝手な結婚は許さないという親との絆が煩わしく、結婚する気はない。ストライキ指導者である主人公を愛するが、闘いを優先させ、自制して打ち合けない。ターミン像はティンペーミンが好ましく思う娘を数人合わせて、気に入ったキャラクターを取り出した「女子学生の中で最も感じのよい、最もよいと考えられる娘の典型」⁽⁶⁾であり、当時の彼の理想的女性像でもあった。

進歩的女性像は、独立直前のビルマを舞台とした長編「開けゆく道」(1949)の25才の教師でビルマ共産党員であるターメに至って複雑化される。時代の情勢が複雑化した時、優しく美しく勇敢なこの進歩的女性も様々な苦悩を負わざるを得ない。社会党員の恋人との愛に悩み、嫉妬猜疑に苦しみ、党と恋人の択一を指導部に迫られて苦悩の末愛を捨てる。ティンペーミンはターメに共産党を、その恋人に社会党を象徴させ、二党の特徴をそのキャラクターに取り込んだ。二人の不和や和解に当時の両党のそれを暗示し、激動を生きる個人を描こうとした。作為的な印象を与えないのは、ターメ像が人間的に描ききれているからであろう。

その後の時代を生きる進歩的女性像は描かれていない。「開けゆく道」よりやや古い時代を背景とした「東より陽の昇るがごとく」(1950—53)の高校生キンティッは完璧な進歩的女性であるがターメやターミンを発展させたものではなく、新しく創造されたキャラクターである。婦人運動家である情熱的な母の血を受け、ゆるがぬ思想を持ってデモや集会に参加し、負傷しても信念を貫く。美人ではなくむしろ地味で、教養が深い。動揺する主人公の希望の象徴として存在し、内面的掘り下げはない。ティンペーミン自身が自らの闘争経験の中で最もよくかわりを持ったはずの進歩的女性像は多様であり、独立前のビルマの段階で完結をみないままに中断された。

そして第四に、独立後の不安定な社会の荒波の中で、明日をも知れぬ生活苦にもがく底辺の女性像が続く。短編「独立すれば」(1948)の行商人エーニョンは、ビルマ独立の日に結婚式をあげるが夫は解雇される。楽天的に夫を励まし、二人分働くことを決意するが、前途の保障はない。短編「櫓の折れた漕ぎ手ゴエセイ」(1955)の露店商ゴエセイは、女郎屋へ売られるところを救い結婚してくれた夫の恩に報いるためには命をも捨てるつもりであったが、夫が毆にかかって逮捕された時、「夫に顔むけのできないこと」をして保釈金を作り、夫の釈放を待たずして姿を消す。短編「その彼女とバラスイートウ」(1966)には、教育がないためまともな職業では食べていけず、闇屋をする「彼女」が部分的に登場する。健気な心根を持ちながら泥沼に沈んでゆく彼女達は、短編でもあり詳しくは描かれないが、時代と共に悲惨になるその姿に、ティンペーミンの独立後のビルマ社会に対する悲観的な気分が反映されている。独立後現代にかけてこの様な女性像が長編ではなく短編でしか描かれていないのも一つの特徴である。

第五の型として、容姿内面とも美しく創造された完璧な美女タイプがある。長編「現代の悪霊」

(1940)の看護婦アピューは、性病撲滅運動に一生をささげる夫を側面からささえる。長編「愛すればこそ」(1951—52)の露店商キンウィンは、恋人の背信後も彼を愛し続け、最後に再び愛を取り戻す。聡明な彼女達は、共に男性を励まし、男性の心を変えるだけの芯の強さを持つ。それは愛情の強さに起因し、進歩的女性達の強さとは又異質のものである。第五のタイプにはやや希薄であるが、ティンペーミンの主な女性像に共通する特徴は、モデルのあるなしにかかわらない現実感、生命感であった。その背景にある彼の女性観とはどのようなものであったか。

2

思春期迄のティンペーミンの女性観は平凡なもので、やや女性を軽視する傾向にあったといえる。最も身近な女性母親は、回想「母」(1948)⁽⁷⁾によると無口で我慢強く寛大であった。学歴がないために出世ができない父親が、しばしば不満を爆発させ、酒の勢いで彼女を罵倒し殴っても全く受身的であったという。この時期には母からの影響は直接的には見られない。「東より陽の昇るがごとく」の半自伝的傾向を持つ導入部分では、主人公が先輩見習僧から女の愛らしさ愚かさ狡さを教わり、女のくどき方を伝授されたこと、出世第一主義の父親から、愛情を基礎とした男女関係を無視し、女性を一段低いものと見て、美しく財産のある女を娶るよう助言されたこと等の経験が後年迄影響を与えたと語られる程度で、とりたてて特徴的な女性観は見られない。

1930年の反英一揆タヤワディの乱を契機にティンペーミンの政治的覚醒が進み、1933年ラングーン大学入学後独立運動に足を踏み入れて、その女性軽視の傾向も観念的には克服されつつあった。だがそれはまだ現実の女性観の形成とは結合せず、その鋭い観察力は諷刺の目を持ってまず老嬢像を作り出したといえよう。身近かの女子学生達にはむしろ失望反撥が感じられている。裕福で派手でヨーロッパかぶれた女子学生群像が、「女傑」「ダベイフマウチャウンダー」にリアルに描かれる。ティンペーミンの分身的存在「ダベイフマウチャウンダー」の主人公にも、女子学生はモダンでお洒落で贅沢だと批判させている。彼の女性に関する発言は少ないが、この時期には英語的教養を持つインテリ女性の軽薄な生活態度を批判したエッセイも若干ある⁽⁸⁾。こうして皮肉な観察を続けながらも、理想的進歩女性出現への期待が「愛国者キン」「女傑」を生み出したのであろう。

ラングーンの生活に慣れるにつれ、生来の外交性積極性から女性との日常的な接触が進んだが、それらはまだ確固とした女性観に基づくものではなかった。4人の女性の間を揺れる「東より陽の昇るがごとく」の主人公さながら移り気で、恋人という名に値する女性を持ちながらも複数の女友達とのつながりを断たず、真実の愛を理解していないと友人から批判されている。1936年、特派員としてインドへ行く直前この恋人との交際をやめたのは、政治活動に命を捨てる覚悟であるため将来の確約はできないという表向きの理由とは別に、もっと多くの女性と恋愛する自由を得たかったからであるという⁽⁹⁾。1942年の2度目の渡印時迄は、この状態が繰り返されていた。「私の恋人は私を庭師であると言う。彼女自身をバラに例える。私が季節ごとに咲く様々な花々

の後を追ってゆくと、庭師の手入れのゆきとどかないバラは枯れてしまうと彼女は言う。旅に出る前私はそのバラに再び近づき、年中枯れないよう水をやり土を整えようとした。が、そうはいかなかった。」⁽¹⁰⁾ この恋人は病死し、ティンペーミンは自分の移り気と良心の呵責は感じたが、それが克服されるにはさらにしばらくの期間を要した。当時の進歩的女性達の描写に固さが見られるのも、彼が深く真剣な愛をまだ知らず表面的で観念的な女性観を持っていたためであろう。そのみならず彼は売春制度を必要悪として認めていた。性病による入院を体験し、性病の害悪を告発するために書かれた「現代の悪霊」は、売春制度を女性側の問題としては全くとらえていない。同書で彼は自称社会主義者達に、ビルマには政治活動に命を収める男を好む女はないから一生結婚はできないが、自然の理法たる肉欲処理の対象として娼婦の存在は利にかなうと語らせている。

ティンペーミンはインド亡命中インド共産党の一部の人々から思想的影響をかなり受けたが、その女性観についても又そうであった。1943年ボンベイのインド共産党本部滞在中「男女関係も自然で調和のとれたものである。僧侶的ストイックさはなく、さりとて姦通や性的退廃もない。過度の恥じらいも見られないし、混乱や不勤慎さも見られない。」⁽¹¹⁾ ことを感心し「年令がさとしたのか共産党がさとしたのかかわからない。」⁽¹²⁾ が、以下のような心境の変化が訪れる。第一に、「現代の悪霊」執筆後も売春制度を利用していたが、売春は男女関係で女性が最も虐げられる制度、人間搾取の最悪の形態であり、男女関係は常に平等であるべきと考え、第二に、気に入った女性に会うたびにくどき結婚を真剣に考えることはなかったが、一人の女性を選び固く愛すべきだと考えるようになる。

この体験を踏まえた新たな恋愛、結婚は、彼の生涯で政治的にも最も波乱に富んだ時期におこなわれた。1944年ビルマ共産党に入党し、45年同党書記長に任じられてインドから帰国したティンペーミンは、46年11月同党本部に勤務していたキンチーチャーと結婚した。「当時の政治的立場政治的見解が私に影響を与え、時々恋人として不自然な関係となったようである。私の気持を無理に抑制していたふしがある。」⁽¹³⁾ と、その交際はきわめて慎重であった。既に1946年には党内のティンペーミンの地位はその思想的右傾化を理由に揺らぎ出し、7月には書記長から政治局員へ、10月に内閣唯一の共産党員閣僚として農林水産相をつとめるが11月には辞職、翌47年2月に休党命令を受け、48年3月に離党している。この微妙な状況を反映し、恋愛や結婚を中傷の種にされないためにも、彼は46年6月婚約後ただちに党中央に報告し、交際中仕事を最優先した。現存する恋文にも甘さはなく、活動報告に終始する。だがその慎重さこそ彼の深い愛情のあらわれであった。離党後のクーデター未遂事件にかかわる服役も含めて、彼の人生最大の苦難の時期が一人の女性と共に歩まれ、彼が生涯この女性のみを愛し続けたことはあきらかであるから。この女性観の変化、恋愛、結婚がティンペーミンの女性像に以前とは異なる柔軟さをもたらしたことは、実業家達の女性的側面の描写の豊かさや、愛に悩むターメやキンウィン像が物語っている。

もとより鋭い観察力によってリアルに描写された様々な女性像は、その女性観の変遷を経て深

められていこうとしていた。それらは最後のティーターピョン像にどのようにつながっていくのだろうか。

3

27才の作家ミャトゥインを語り手とする「ティーターピョン」は、避暑地メイミョウの修道院で育ちラングーンに來た19才の孤児ティーターピョンの、1952年4月から5月にかけて45日間における体験を骨子とする。死別した筈の両親が各々身分を明かさず登場し、ティーターピョン自身も知らないその生い立ちの一部分が筋の進行と共に明きらかにされる。彼女が3才の時に離婚した父と母の娘をめぐる争いに、彼女を愛するミャトゥインとその友人である画家、技師の3人の争いが絡む。父の死で筋はクライマックスに達し、ティーターピョンとミャトゥインの愛の確認によって結ばれる。

ティーターピョンは、彼女への愛に悩む語り手の視点で描かれる。美しく聡明で教養が深く弁舌さわやかである。修道院という環境で育ったので派手で西洋好みではないかという語り手の偏見に対し、ビルマ女性の誇りを持ち堅実であることも明らかにされる。三人の求愛者に対しても冷静に誠意を持って対処する。最初実業家夫人である母のもとに引き取られるが、後に隠亡頭である父を選ぶ。

ティーターピョン像は過去のティンペーミンの女性像の中では、最も現実性に欠けたアピューやキンウィン等の完璧な美女タイプに属する。だがそれらをさらに発展させたキャラクターではなく、むしろより完璧でより美しくより掘り下げに乏しい。同じ第三者である語り手の視点で描かれた「東より陽の昇るがごとく」の女性達の現実感生命感には全く及ばない。完結長編小説の初の女性主人公ではあるが、過去のティンペーミンの女性像追求の経験に立脚せず、むしろ後退が見られる。

ティーターピョン像が完璧すぎる、現実離れしすぎるという批評⁽¹⁴⁾に対して、ティンペーミンはそれを作品の欠陥の一つと認め、その一因を作品の原型がシナリオであり又新聞連載小説でもあることによる舞台の時間的制約という点に求めた⁽¹⁵⁾。「ティーターピョン」は1952年にシナリオが書かれ映画化もされた後、1967年10月より1968年1月迄小説化されて日刊ボウタウン紙に毎日連載された。ティンペーミンは長編小説の主人公を、典型として完璧である者、未完から完璧へ成長していく者の二種に分類し、どちらかといえば後者を好んだ。従って3才の孤児から19才の近代女性へ「未完の状態から変革を経て完成したティーターピョンへと持っていけば、完璧すぎるティーターピョンの問題は起こり得なかっただろう。」⁽¹⁶⁾が、時間的制約を持つシナリオや新聞小説では45日間の出来事の中に過去を回想的に取り入れた方が効果的であるので、最初から完璧なティーターピョン像を示したという。だが、短期間で示され典型として完璧であっても、現実離れない人物像を描くことが可能であることは、過去の女性像が証明している筈である。ティーターピョン像の不自然さは、小説全体の問題に起因する。

「ティーターピョン」は長編小説としては14年の空白の後に書かれた。この14年は、ティンペーミンの作家生命に重大な意味を持つ空白であった。1953年に完成した「東より陽の昇るがごとく」を最後に、ティンペーミンの小説から独立闘争は姿を消した。以後14年間に、短編小説が7編書かれた。その中では貧しさ不正の中でもがく庶民の苦しみが、彼等を救えない無力感に悩む知識人の視点を通して語られ、余生少ない老人達の老いの悲哀がユーモラスに語られ、作品が従来と異なる傾向を持ちはじめたといえる。この期間中小説よりむしろ、紀行、文芸評論、時評などの執筆が増え、ティンペーミンの作品全体が質的量的変化をなす。

この14年がなぜ彼の作品に変化を与えたのか。ティンペーミンは小説家としての出発点より、小説を思想宣伝の武器、被抑圧階級解放の武器と位置づけた。短編小説は気軽に楽しみながら書かれたが、「愛すればこそ」を除く長編小説は、植民地ビルマを舞台とし、社会の矛盾の源である植民地制度を直接に間接に批判し、自己の政治的主張を訴えるものであった。その背景に彼の活発な政治活動があったことも見逃せない。1953年以降も彼は合法的反政府勢力の一員として多忙であった。地下には強力な反乱軍が存在し、中央政界は離合集散を繰り返していた。ティンペーミンはその一匹狼の性格により様々なトラブルの渦中に身を置き、傷つくこともしばしばであった。その文学的才能の枯渇を惜しみ、政治を捨て文学に専念することを勧める声もあったが、彼は、自分の理想を実現する体制となった暁にはいつでも政界を去る用意があると宣言して、なお政界に執着した。彼が政界を離れたのは、1962年ネウイン軍事政権登場後であった。その後文化人として側面から軍政に協力したのは、軍による反乱軍の鎮圧や強引な社会主義化政策によって自分の理想とする社会が実現すると信じたからに他ならない。

しかし1962年以降もティンペーミンの筆は進まなかった。小説家を志して文筆の道に飛び込んだ彼の念頭から、長編小説執筆意欲が全く消え去ることはあり得なかった。まして文芸評論においては、文学界の重鎮として芸術至上主義を攻撃し、労働者農民に奉仕する新しい文学を論じ続けていたのである。新たな長編小説を書かねばならないということを彼は十分理解していた筈である。だが植民地制度に諸悪の源を求め、告発攻撃するという過去のパターンは、戦後のビルマ社会を舞台とした長編小説にそのまま適用できなかった。厳然と存在する社会の諸問題を取り上げることはできても、矛盾の根源を何に求めるかという壁に彼は突き当たったに違いない。彼が積極的に協力した軍事政権を批判することは、その作家生命を失うことにも通じる。その厳しい言論出版統制の網の目をくぐって、芸術的にも高い諷刺や批判の小説を書くには高度な技術を要するであろう。何をどのように書くべきかという長い逡巡の期間が、「ティーターピョン」の前に存在したと考えられる。そしてそれらが明確にされぬまま、執筆は着手されねばならなかった。

「ティーターピョン」執筆にあたり「『東より陽の昇るがごとく』を書いて以来長編を一編も書いていなかった私は、今長編を書きたい気持がムラムラと湧いている。」⁽¹⁷⁾と、かつてない奮起が語られた。執筆の目的は第一に、彼が芸術至上主義を唱え実質的には旧体制に執着する反動作家ではない証として、小説を通して社会的政治的主張をすること、第二に、ブランクが空きすぎ

て小説家としての技術が鈍ることを防止することであったという。つまり小説家ティンペーミンの健筆ぶりを示すことにあったといえよう。ティーターピョン像の弱さは、この2つの目的を完全に果たすことができなかったところに起因するものであった。

第一の目的を果たすため、彼はテーマに階級的視点なるものを取り入れねばならなかった。だが、テーマをまず決定して後それに基づき筋構成人物像を組み立てるという手順を厳守してきた彼が、「ティーターピョン」ではまず筋が先行し後にテーマを入れるという手順を取った。そのためテーマが筋によって制約を受け、自由に使いこなせなかったという⁽¹⁸⁾。なぜ彼が古いシナリオの筋に執着し、それを14年の空白の後の再起作とも言うべき長編に用いたかについての言明はない。彼は過去にシナリオの小説化の欠陥を痛感している筈である。「愛すればこそ」の映画の出来映えを不満として小説化した時、既に彼は「私は小説を小説として独立させて書くことこそ好む。シナリオを筋とした小説を書くことには得心しない。芸術的側面で欠陥を持つと考える。」⁽¹⁹⁾と悟っている。にもかかわらず不本意である筈のシナリオの小説化、特に筋のみの先行を許したのは、安易さ、全く新たな筋を創造することへの自信のなさから来たものとしか考えようがない。

彼の言う作品のテーマとは「上流階級と下層階級の抗争」⁽²⁰⁾である。上流階級とはティーターピョンの母とその周囲の社会、下層階級とはティーターピョンの父とその属する隠亡ならびに都市勤労市民の社会であり、ティーターピョンはこの間を揺れる中間階級の象徴とされた。母から父へ移る彼女の気持ちに、中間階級の揺れという「一つの階級的性格が移動する有様」⁽²¹⁾を強調したいがため、その他のティーターピョンの性格を完璧なものにしたという。だが階級対立に肉身の愛憎を絡める場合「人間の基本的精神を斥け階級精神を無理に優先する」⁽²²⁾傾向を防がねばならず、そのためテーマを筋や人物の中に自由に入れることができなかったとも言う。

ティンペーミンが1952年当時のビルマ社会において上流階級と下層階級の対立を階級闘争ととらえ、実業家夫人と隠亡頭の娘をめぐる争いを階級的争いと位置づけたところにかかなりの無理があろう。さらに、母親を取り巻く上流階級なるものの実態は十分明らかにされず、父親達がかかわる貧民の解放闘争なるものの内容も「取り入れると筋の枠に収まらず、闘争と筋がバラバラになる。」⁽²³⁾という理由で描かれない。中間階級の動揺性の象徴であるというティーターピョンの内面的揺れなるものも、十分描写されていない。派手好きで夫の職業を卑しみ、夫と子供を捨て他の男のもとへ走った母の過去を知ったこと、父が命を捨てティーターピョンを取り戻そうとしたことを契機とした母から父への彼女の移動は、きわめて冷静な判断に基づく迅速な行動であり、あえて階級的性格の移動なる意義づけをする必要があるかどうか疑問である。ティンペーミンが反動作家でない証として漠然としたままの階級概念を無理に導入しようとしたことが、ティーターピョン像の不自然さの一因となったと言えよう。この作品に対して、階級闘争をもっと明確に取り入れるべきである⁽²⁴⁾、階級概念を無理に取り入れすぎて作品を駄目になっている⁽²⁵⁾という一見異なる批判が同時に起こったのも、階級のとらえ方のあいまいさによるテーマと筋の不均

衡の故であろう。

第二の目的、筆の衰えは防止されたのか。「ティーターピョン」執筆は彼にノンフィクションと異なる小説創作のむずかしさを「事実をあるがままに示すのみに終らず、空想を取り入れることも必要である。ふくらませねばならない。修飾せねばならない。同時に、創造が現実とかけ離れないよう、ふくらませることが現実を歪曲しないよう、修飾することが現実を隠さないようコントロールしなければならない。」⁽²⁶⁾ ノンフィクション以上に「さらに空想しなければならない。さらに思考しなければならない。さらに言葉を選ばねばならない。」⁽²⁷⁾ とあらためて痛感させる。それと同時に明らかになったのは、執筆速度の衰えであった。「昔、若い時、私は筆が速かった。今、筆は速くない。私と同世代の作家の一部は油が乗っている盛りである。私は彼等のように筆が速くなくなっている。」⁽²⁸⁾ 過去には予想もしなかった創作の困難さ、執筆速度の衰えが実感され、「ティーターピョン」執筆にはかつてない努力が要された。そして完成の後には、容赦のない批評が待ち受けていた。

久々の長編は多くの読者に期待されていた。「ティンペーミンの小説の腕前を見たい」ので熱心に読んだ作家ティンガー（1909—）が、これを別の新人作家の作品と比較して新人作家のそれに軍配を上げ、「卒直に言えば一流と二流ほどの差であり、有名な大作家ティンペーミンの以前の水準に及ばない。」⁽²⁹⁾ と評したように、従来の愛読者からは不評であった。本は売れ、新しい読者層も増え、今迄の作品にない目新しさが評価されて1968年度民族文学賞第4位に入賞したことは、彼にとって救いであった。だがその目新しさの中味とは、ビルマ独立闘争を描かずビルマ社会の矛盾を告発せず肉身の愛憎のみが描かれたという点であろう。その意味では、力作「東より陽の昇るがごとく」と同時期に書かれたが、シナリオの小説化という技法上の問題、単なる恋愛小説という内容的な問題から作者自身が好まず、長年脚光を浴びずに葬り去られていた⁽³⁰⁾「愛すればこそ」と同傾向の作品になったといえる。「愛すればこそ」は社会的政治的主張を持たず、社会的背景を必要に応じて取り入れるにとどめ、愛のみにテーマをしばったためむしろ一定のまとまりを持った。だが「ティーターピョン」は、長年の休筆の後の作者の意気込みが先行しすぎたために中途半端な作品となり、ヒロイン・ティーターピョン像も、ティンペーミンの過去の女性像を発展完結させたものとはなり得なかったのである。

お わ り に

1969年以降、ティンペーミンの作風はさらに完全に変化した。この年にボウタタウン紙に連載され出版された「海の旅人と真珠姫」は、長編小説と銘打たれているものの作者の海洋航海の体験に虚構を一部導入した紀行的記録小説であった。その後小説として発表される作品のいずれもが、ティンペーミンが「ティーターピョン」で要した創造への努力とは無関係に近い身辺雑記風の随想となっていた。この変化は、ティンペーミンが「ティーターピョン」を失敗作と認めたことを物語るのではあるまいか。

鋭い観察力に加え女性観の定着は、テインペーミンの女性像をますます豊かにする筈であった。だが14年の休筆の後書かれた長編のヒロインは、過去の教訓とは別のところで形成され、小説不詳の一因をもたらした。この作家の作品傾向迄も変えてしまうことになった。最愛の処女作「愛国者キン」から最後の創作「ティーターピョン」迄、テインペーミンの女性像は、小説を愛した一作家が創造を断念せざるを得なくなる過程をも示している。

注

- 1) Thein Pe Myint: 'Kyunaw i Achitu' 1974, Rangoon, p. 193-4
- 2) Thein Pe Myint: 'Kyunaw Wuttudehma Kyunaw Zatsaungmya' 1969, Rangoon, p. 22
- 3) 同上, p. 49
- 4) 同上, p. 48
- 5) Thein Pe Myint: 'Kyunaw i Achitu' p. 287
- 6) Thein Pe Myint: 'Kyunaw Wuttudehma Kyunaw Zatsaungmya' p. 32
- 7) Thein Pe Myint: 'Wuttudo Baungjout' 1966, Rangoon, p. 257-277
- 8) それらは1935年10月5日付ディードウ紙、1935年11月発行のサーソードー誌一卷1号、1936年2月発行のサーソードー誌一卷3号にペンネームで発表されている。
- 9) Thein Pe Myint: 'Tet Khit Tet Lu Tet POUNGJI Thein Pe' 1975, Rangoon, p. 277-279
- 10) Thein Pe Myint: 'Sit Atwin Khayide' 1968 (第4版), Rangoon, p. 31
- 11) 同上, p. 268
- 12) 同上, p. 269
- 13) Thein Pe Myint: 'Takhudho Ngweyadudhabin' 1973, Rangoon, p. 167
- 14) Thein Pe Myint: 'Thi Ta Pyoun' 1968, Rangoon, p. 495
- 15) 同上, p. 504
- 16) 同上, p. 504
- 17) 同上, p. 4
- 18) Thein Pe Myint: 'Kyunaw Wuttudehma Kyunaw Zatsaungmya' p. 57
- 19) Thein Pe Myint: 'Achitsit Achithman hnit Pattheywe' Shumawa, vol. 31, No. 370, 1978. 3, Rangoon, p. 39
- 20) Thein Pe Myint: 'Thi Ta Pyoun' p. 498
- 21) 同上, p. 505
- 22) 同上, p. 505
- 23) 同上, p. 498
- 24) 同上, p. 500
- 25) Thin Ga: 'Thein Pe Myint i Thi Ta Pyoun' Boutataung Dadinza, 1968. 1. 31, Rangoon
- 26) Thein Pe Myint: 'Thi Ta Pyoun' p. 493
- 27) 同上, p. 494
- 28) 同上, p. 494
- 29) Thin Ga 前掲書
- 30) Thein Pe Myint: 'Achitsit Achithman hnit Pattheywe' p. 39